

W. ハウフの『チビ助ムック』

—— アウトサイダーとしての主人公の社会的意識について ——

梅 内 幸 信

1. 醜い「チビ助ムック」

本稿の目的は、ハウフ (Wilhelm Hauff, 1802-1827) の『チビ助ムック』の分析・考察によって、主人公ムックが一応社会的成功を収めたにもかかわらず、有能な市民としてではなく、その社会的道義心ゆえにアウトサイダーへの道を歩む過程を検証するところにある。

ハウフが最晩年の3年間に連続して公刊した『童話年鑑』の第1巻目は、1826年に出版された。枠物語の形式を採ったその童話年鑑第1巻の中に『チビ助ムック』¹は収められている。この童話の主人公ムックの人物像は、これに類似したハウフの童話『チビの鼻助』のそれと比較するとき、やや異なっていることに気づく。つまりチビの鼻助は、もともと野菜と果物売りハンネの息子で、美男の少年ヤーコブである。このヤーコブが老婆の厚かましい態度に怒って、この老婆を非難したために、彼は最初リスに変えられて後、7年間老婆の元で料理の技術を叩き込まれ、その挙句、現実の社会に戻ってからは、チビで、鼻が異常に長い醜男に変えられてしまうのである。しかしヤーコブは、魔法使いヴェッターボックの娘ミミの援助で、その後元の美しい青年の姿に戻ることができる。ところが、『チビ助ムック』の主人公ムックは、最初から次のような醜い姿で描かれている。

小さなムックは、私が知り合ったときにはもう年老いた職人でしたが、背丈が1メートルか、1メートル20センチしかなく、そのうえ、奇妙な姿勢好をしていました。というのも、ひどく小さくきゃしゃな体つきで、他の人の頭よりはるかに大きくて重い頭を支えなければならなかったからです。(S. 78)

1 『小さなムックの話』、『冷たい心臓——ハウフ童話集』所収、乾侑美子訳、福音館書店、2001年、129-163ページ参照。Hauff, Wilhelm: *Sämtliche Märchen*. Hrsg. v. Hans-Heino Ewers. 1986 Stuttgart (Reclam), S. 78-98. この童話からの引用に関しては、このレクラム版に従い、本文引用末尾にページ数を付す。主人公のMuckという名前を訳者乾氏は、「ムク」と表記している。確かに、原語の発音に近い表記かも知れないが、しかし、日本語において「ムク」は、なんとなく坐りが悪い。例えば、「マック」を「マク」してみれば、納得ゆくであろう。そこで、本稿では「ムック」を採用し、筆者の訳を提示する。

1826年に出版された第一の年鑑には次の6つの物語が収められている。1. 『コウノトリになったカリフ』(*Die Geschichte von Kalif Storch*), 2. 『幽霊船の物語』(*Die Geschichte von dem Gespensterschiff*), 3. 『切り落とされた手の物語』(*Die Geschichte von der abgehauenen Hand*), 4. 『ファトメの救出』(*Die Errettung Fatmes*), 5. 『チビ助ムック』(*Die Geschichte von dem kleinen Muck*), 6. 『偽王子のメルヘン』(*Das Märchen vom falschen Prinzen*)。1827年に出版された第二の年鑑には次の8つの物語が収められている。1. 『チビの鼻助』(*Der Zwerg Nase*), 2. 『何も見ずのユダヤ人アブナー』(*Abner, der Jude, der nichts gesehen hat*), 3. 『哀れなシュテファン』(*Der arme Stephan*), 4. 『焼かれた頭』(*Der gebackene Kopf*), 5. 『人間に扮する猿』(*Der Affe als Mensch*), 6. 『黄泉の国の人々の祭り』(*Das Fest der Unterirdischen*), 7. 『雪白とバラ紅』(*Schneeweißchen und Rosenrot*), 8. 『アルマンゾールの物語』(*Die Geschichte Almansors*)。1828年に出版された第三の年鑑には次の4つの物語が収められている。1. 『鹿印金貨の伝説』(*Die Sage vom Hirschgulden*), 2. 『冷たい心臓——メルヘン (その1)』(*Das kalte Herz. Ein Märchen. Erste Abteilung*), 3. 『ザイトの運命』(*Saids Schicksale*), 4. 『冷たい心臓——メルヘン (その2)』(*Das kalte Herz. Ein Märchen. Zweite Abteilung*)。中谷彰「ヴィルヘルム・ハウフのメルヘン・アルマナハについて I」, 『九州共立大学経済学部紀要』第64号, 1996年, 97-110ページ参照。中谷彰「ヴィルヘルム・ハウフの『第二のメルヘン・アルマナハ』に組みこまれたヴィルヘルム・グリムの二つのメルヘンについて」, 『九州共立大学経済学部紀要』第100号, 2005年, 19-30ページ参照。中谷彰「ヴィルヘルム・ハウフと読者の世界」, 『ドイツ言語文化と社会』所収、北樹出版、1994年、76-106ページ参照。

このようにムックは、魔女によって醜い姿に変えられたのではなく、生まれつき醜い格好として設定されている。身長は120センチ程度で、加えて頭が異常に大きいので、ムックのこのアンバランスがグロテスクな雰囲気醸し出している。その上、着ている衣服が標準から大きくかけ離れているので、次のように周囲の人々には異様な印象を与えずにはいない。

家の戸が開くと、まず大きな頭がのぞくのですが、これがさらに大きなターバンに包まれているのです。それから体の残りの部分が現れますが、着古してすりきれたマント、ダブダブのズボンに幅広の帯という格好で、帯には長い短剣が差してあり、それがまたひどく長くて、ムックが短剣をさげているのか、短剣がムックをさげているのか、分からないほどでした。(S. 78)

おまけにムックは、チビにもかかわらず、「見たこともないほど大きく、幅の広すぎる靴を」(S. 78) 履いている。このムックにはすでに母親はいなかったが、このムックの面倒を見ていた父親は、ムックが16歳の時に、ひどく悪い転び方をして、それがもとで死んでしまう。こうしてムックは、天涯孤独の孤児になり、貧しく、教育も受けない状態で、取り残されたのであったが、さらに悪いことに父親は、「親類の人たちに、返せないほどの借金をしていた」(S. 80) のであった。ムックは、父親の形見としてその衣服をもらうが、これを次のように変形して身に付ける。

けれどもムックは、すぐに工夫を思いつき、その長すぎるところを切って、身にまといました。けれども、幅をちぢめるのは忘れたらしく、それでムックのいでたちは、今でも見られる通り、風変わりなものなのです。大きなターバン、幅広の帯とダブついたズボン、青いマントなど、どれもみな、死んだ父親の残したものをそのまま着ているのです。さてこうして、父親の長いダマスクス剣を帯に差し、杖を手にムックは、市門から出ていったのです。(S. 80)

醜い外貌に加え、このような異様な衣装を身につけるムックは、グロテスクな印象を与えずにはおらない。この関連においてW. カイザーは、その著書『グロテスクなもの』において、文学・絵画・音楽の分野におけるグロテスクなものを扱った上で、次の4つの定義を提出している。

1. グロテスクなものは疎外された世界である。
2. グロテスクなものはエス (Es) の表現である。
3. グロテスクなものの表現は不合理なものをもてあそぶ遊戯である。
4. グロテスクなものの表現はこの世において魔神的なものを呼び出しつつ追い払うという試みである。²

2 Vgl. Kayser, Wolfgang: *Das Groteske*. Oldenburg (Gerhard Stalling) 1957. カイザー、ヴォルフガング『グロテスクなもの』竹内豊治訳、法政大学出版局、1972年、258-263ページ参照。

1. の定義において示唆されているように、作家がグロテスクなものをその作品において提示するとき、やはりその作家自身がなんらかの意味において、社会にあって「疎外されている」ことが暗示されている。その作家は、自らが「不合理なものを弄び」、そうすることによって既存の社会認識を破壊し、新たに構築し直そうと試みていると考えられる。つまり、ハウフが生き抜いた時代は、過渡期の時代であった。自由・平等・博愛をスローガンとして掲げるフランス革命やナポレオン戦争による神聖ローマ帝国の没落等によって旧制度が崩壊し、それと共に旧来の価値観・世界観・歴史観、要するに世界把握の諸範疇が無効となり、それに代わる新しい諸範疇が求められていた時代であったのである。

このような混沌の時代において「美しいもの」、「完全なもの」、「崇高なもの」に対して「醜いもの」、「不完全なもの」、「卑小なもの」が、それらと同等の存在権を主張し始めたのであった。そして「ロマン的なもの」、「古典的なもの」と同列の席を要求したのであった。アリストテレス以来、芸術の対象は「美しいもの」、すなわちなんらかの意味において人間の「高級感覚」に快適感を与えるものに限定されてきたのであったが、³ここに至って芸術の対象の中に、人間に不快感を催させる「醜いもの」までが堂々と侵入してくるのである。この時代の趨勢に應えるかのように、1853年にローゼン克蘭ツ（Karl Rosenkranz, 1805-70）の『醜の美学』（*Ästhetik des Häßlichen*）が出版される。⁴彼はその中で、「醜」の概念を次のように弁明している。否定概念として生物学には「病氣」が、そして倫理学には「悪」が、法律学には「不正」が、宗教学には「罪」がある。従って、「美の理念」、「美しいものの制作、すなわち芸術」、「芸術の体系」という三大範疇を包括する名称としての「美学」は、当然のことながら美の否定概念である「醜」をも含まなければ片手落ちであると。⁵しかも、ローゼン克蘭ツは、旧来の「快・不快の原理」に対抗して、「醜」にも健全な意味と病的な意味という二通りの意味で「快適感」（Wohlgefallen）が存在すると主張する。「健全な意味では、正当化され、美の反作用によって止揚される場合である」、また、「病的な意味では、時代が物質的・道徳的に墮落してしまい、真実にして、かつ素朴な美を理解する力に欠けてはいるが、浮薄な墮落に対する辛辣な当て付けをなおも芸術において楽しもうという場合である。そのような時代の人々は、内容的に矛盾を含む混淆した感情を好む。無感覚になった神経を掻き立てるために、全く前代未聞のものや不調和極まりないもの、この上もなく不快なものがひとまとめにされるのである。分裂した精神は、醜いものを見て楽しむが、それは醜いものが分裂した精神にとっては、その否定的状況の、いわば極致となるからである」⁶と主張するのである。

いずれにしても、ハウフが主人公ムックにグロテスクな風貌を与えている動機は、実は現在の世

3 アリストテレスに従えば、「高級感覚」とは、肉体的欲望に捕われない視覚や聴覚（場合によっては嗅覚をも含む）であり、これらの感覚の媒介によって人間に快感を与えるものが美であると言われる（竹内敏雄『アリストテレスの芸術理論』弘文堂、1969年、508-510ページ参照）。

4 Rosenkranz, Karl: *Ästhetik des Häßlichen*. Königsberg (Verlag der Gebrüder Bornträger) 1853. Neudruck: Darmstadt (WBG) 1973. ローゼン克蘭ツ、カール『醜の美学』鈴木芳子訳、未知谷出版、2007年、参照。

5 Ebenda, im Vorwort, S. III-IV.

6 古代ギリシャ・ローマ文学において、すでに「醜いもの」は登場していた。これは恐らく、ギリシャの汎神論的思考の影響から生じたものと思われる（Vgl. Müller, Gerhard: Bemerkungen zur Rolle des Häßlichen in Poesie und Poetik des klassischen Griechentums. In: *Die nicht mehr schönen Künste*. Hrsg. von H. R. Jauß. München [Wilhelm Fink] 1968, S. 13-21）。

界そのものがグロテスクな様相を帯びていることを読者に認識させようとしているからに他ならない。ここで読者は、認識の止揚を求められているのである。

2. 不平を言うムック

ムックの人生は、生まれた当初から不連続きのものと言わざるをえない。2日間、畑の作物を食べ、地面の上に寝て過ごし、3日目の朝、丘の上から大きな町を眺めている。ムックは、その町で幸せを見つけようとするのである。あまりの空腹のため、猫をたくさん飼っているアハヴツィ奥さんの家で、猫にやるおかゆを恵んでもらうが、奥さんに同情され、その家の下男となる。奥さんは、雄猫2匹、雌猫4匹飼っているが、これらの猫たちは、夜には絹のクッションの上に寝かせられ、ビロードのふとんでくるまれて眠る。ところが猫たちは、奥さんがいない間に悪さをし、部屋をひどく荒らす。しかしながら、アハヴツィ奥さんは、それをムックのせいにしてしまう。アハヴツィ奥さんは、ムックよりも猫の方を信用しているのである。心底誠意を尽くしても、自分の主人から信頼を勝ち得ないということが、ムックの自尊心をひどく傷つけるのであった。それは、ムックの醜い外見のせいなのであろうか。ムックは、人間を外見によって判断することに大きな反感を覚える。そこでムックは、下男をやめる決意をする。駄賃としてムックは、アハヴツィ奥さんからなにかをもらって行こうと考える。すると、ムックが可愛がっていた子犬が、「大きな靴」と「ライオンの頭が見事に彫ってある散歩用の杖」(S. 85)を持って行くことを勧める。ムックは、この2つの物を持ってアハヴツィ奥さんの家を飛び出すと、この靴がどんどん走る力を持った靴であることに気づく。しかし、その後ムックの夢の中に例の子犬が現れて、杖の持つ次のような不思議な力を教えてくれる。

「ムックさん、あんたはまだ、上靴の正しい使い方を知らないんですね。あれを履いて、かかとで3回回ると、どこにでも好きなところへ飛んで行けるのです。それからその杖で、宝を見つけることができます。杖は、金が埋まっているところでは3回、でも銀なら2回、地面を叩くのですよ。」⁷

まずムックは、王国の宮殿に出向き、自分を飛脚として雇ってもらいたいと王に申し出る。王は、当初半信半疑であったが、しかし、実際ムックは、有能な飛脚であることを実証したので、間もなく王の寵愛を受けることとなる。ところが、これに周囲の人々が羨望の念を抱く。それでもムックは、気にせずに任務に励む。彼の不動心は、次のように描かれている。

小さな体にとてつもなく大きい頭、マントとダブダブのズボン、幅広の帯に長い短剣、小さな足にスカスカの靴——そうなんです！その滑稽な姿恰好を見れば、笑うなど言われても、声を出して笑わずにはおられませんでした。けれど、チビ助ムックは、笑われても一向に動じま

⁷ Hauff, Wilhelm: *Sämtliche Märchen*: a. a. O., S. 86. この「かかとで3回回ると、どこにでも好きなところへ飛んで行ける」上靴も、すでにシャミッソーの『影をなくした男』において見られる「1歩あるけば7里に行くという魔法の靴」から発想されるもので、ハウフ独自の発案ではない（シャミッソー『影をなくした男』池内紀訳、岩波書店[文庫]、1985年、108ページ）。

せんでした。(S. 88)

とはいえ、周囲の人々がムックに不信の目を向けるようになるとムックは、人々の歡心を買うために、周囲の人々に金貨を渡そうと考える。そこで、例の杖を使って金貨を探し出し、それを人々に配る。すると、金貨をもらっていなかった猷酌宮廷官房長は、王が自分に寵愛の徴を示さないことを王の前で嘆く。これに対して王は、猷酌宮廷官房長にその理由を訊ねる。これに猷酌宮廷官房長は応えて、王さまが枢密侍従飛脚には金貨を与えたのに、忠実な家来たちには、何もくださらないではありませんか、と告白する。さらに、実際には自分が盗んでいたのに、これ幸いとばかり、金庫番アルヒャッツは、ムックが金庫から金を盗み出しているという噂を流す。これによってムックは、嫌疑を受ける羽目となる。王は、これを知ると、ムックの死刑を命ずる。ムックは、牢屋に閉じ込められ、次の日の死刑が決められる。王の寵愛を一身に受けていたので、ムックは周囲の人々の羨望の的となったのであった。

人々の関心を引こうと、ムックは金貨を探し出し、周囲の人々に配っていた。そのことがもとでムックは、金庫番アルヒャッツに、王の金庫から金を盗んでいると告発されてしまったのである。しかし、金庫から実際に金をくすねていたのは、金庫番のアルヒャッツであった。にもかかわらず王は、ムックの話を信じようとしなかった。そこでムックは、自分を死刑にしないでくれたら、杖の魔法を試して見せようと申し出る。杖が金貨を探し出す様を見た王は、金庫番が嘘をついていたことを知り、金庫番に自殺を命ずる。真相が判明すると王は、さらにムックがなぜ早く走れるのかという秘密を知りたがる。ムックは、靴の秘密を王に白状する。王は、その靴を履き、その止め方も知らずに走り出したため、最後には気絶して、倒れてしまう。王は、それで腹を立て、「わしは、おまえに自由を与え、命を助けると約束したが、なれどおまえは、これから12時間以内にわしの国から出て行かなくてはならん。さもなくば、おまえは縛り首だ！」(S. 94) と言い放つ。

ムックは、王国を出て、とある森の奥に入る。お腹がすいたので、近くに生えていたイチジクの木の実を食べる。すると彼の耳は、ロバの耳のように長く伸びてしまう。2回目にイチジクの実を食べると、今度は耳が元の形に戻っていた。このイチジクの効き目を知ったムックは、王に仕返しをするために、変装して、王の国へ戻る。ちょうど熟れた果物が珍しい時節であったので、ムックが市場でイチジクを並べていると、料理長がムックのイチジクを買い求める。王がそのイチジクを食べると、王の耳がロバの耳のように長くなり、鼻も長く伸びる。やがてムックは、医者に変装し、宮廷に行く。王さまは、ムックにこう言う。「ここにわしの宝がある。このみっともない、恥ずべき災いからわしを救い出してくれたなら、なんなりと、好きなものをおまえに与えよう。」(S. 97) この機会を逃さずムックは、杖と靴を取り戻す。そしてムックは、王さまにこう言う。「王さま、あなたは誠意のない人です。あなたは、忠実にお仕えした者を、忘恩で報いました。その当然の罰として、いつまでも、そのできそこないの格好のままでおいでなさい。耳はそのまま残しておきましょう。毎日それを見て、チビ助ムックを思い出すようにね」(S. 97)。こう言い放つとムックは、靴を履いたまま、3回かかとで回って、宮廷から逃げ出すのである。⁸

8『チビ助ムック』ではイチジクを食べると、その者の鼻と耳が長くなるが、グリム童話における『レタスロバ』(KHM 122)では、

このようにムックの行動様式を考察してみるとムックは、決して他人を傷つけてはいない。アハヴツィ奥さんの家で、彼女に信じてもらえなかった仕返しをしたときも、単に不思議な力を持つ大きな靴と杖を持ち出したにすぎない。真実を告白したにもかかわらず、ムックを国外追放にした王には、仕返しとして彼は、イチジクを食べて長くなった鼻は元通りに戻してやったが、その際にも王の長い耳は、小さなムックを思い出すようにそのままにしておいたのであった。これらの仕返しは、決して悪意から出ているものではない。やはりそれは、正義を守り、正しい秩序を回復しようとする良心に基づく倫理観から発した行為であると解釈せざるをえないであろう。一見、完成した人格の持ち主と思われる王ですら、人間を外見によって判断し、人間の実体を見抜けないことにムックは失望する。王に長い耳を残すことによって、人間はその醜い外見の下にも誠意を宿していることを銘記させようとしたのであろう。

ムックの本当の名は、「ムクラー」(S. 80; *Mukrah*)という。それは、ドイツ語動詞 *mucken* 「vi. (h)《俗》(抗議・反抗の表現として)ぶつぶつ不平を言う, 低くつぶやく; 反抗の身ぶりをする」⁹に由来している。「不平家」は、一般にドイツ語では *Mucker* 「1. いくじなし, 卑屈者; 偽善者, 猫かぶり。2. 不機嫌な人, 不平家」¹⁰であるが、「反復する意味合い」を込めると、*muckeln* というドイツ語動詞が想定される。そして、この動詞から名詞 *Muckler* 「ムクラー; 繰り返して不平を言う人」という名詞が派生されうるのであろう。

このように、ムックの不平家としての側面が浮上するが、しかし、一体ムックの不平は、果たして無意味な不平なのであろうか？

3. 『チビ助ムック』における魔法

ハウフの童話の中で最も人口に膾炙した童話は、『コウノトリになったカリフ』(1826年)であると思われる。この童話の中で主人公のカリフは、魔法使いのたくらみによってコウノトリに変身し、変身している間笑ってはいけないという禁止事項があるにもかかわらず笑ってしまい、異界で試練を受ける羽目となる。しかし彼は、同様に醜いフクロウに変身させられていたインドの王女ルーザの援助によってその試練を見事克服し、彼女と結ばれる。この童話では、「カリフ並びに大臣のコウノトリへの変身」、「インドの王女ルーザのフクロウへの変身」、「魔法使いミツラの息子のコウノトリへの変身」が扱われている。ここでは、明確に変身の魔法が用いられている。『チビの鼻助』(1827年)では、「魔法使いの老婆が主人公ヤーコブをリスに変身させる」、「魔法使いの老婆が主人公ヤーコブを鼻の長い小人に変身させる」、「ある年取った妖精がヴェッターボックの娘をガチョウに変身

レタスを食べた者がロバに変身してしまう。この童話において主人公の若い狩人は、賢いばあさんの助言で手に入れた「金貨を生み出す鳥の心臓」と「どこへでもひとつ飛びで行ける願掛けマント」をもらう。しかし、邪悪な魔女とその娘および女中の計略で、狩人はこれらの宝を奪われてしまう。その仕返しに狩人は、これら3人にレタスを食べさせ、ロバに変身させ、とある粉屋にこれら3頭のロバを飼育させる。その際狩人は粉屋に、魔女であるロバには、「日に3度なぐって、1回しか食事を与えない」よう依頼する。そのため、まもなく魔女であるロバは死んでしまう。しかし、当初から若い狩人を好きであった魔女の娘は、深く反省し、若い狩人への愛を告白すると、若い狩人はこの娘と結婚し、その後死ぬまで楽しく暮らすこととなる(Vgl. Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. 3 Bde. Band 2. Stuttgart [Reclam] 1980, S. 172-179)。『チビ助ムック』(1826年)を執筆する以前に、『グリム童話集』(初版第1巻1812年、第2巻1815年)はすでに出版されていたので、ハウフは当然のことながら『グリム童話集』を読んでいたに違いない。「レタスを食べるとロバに変身する」という条件を、「イチジクを食べると、鼻と耳がロバのように大きくなる」という条件に変更することには、大きな飛躍はないと言ってよい。

9 国松孝二(編者代表)『小学館 独和大辞典』[コンパクト版], 小学館, 1990年, 1492ページ。

10 『小学館 独和大辞典』[コンパクト版], 同所, 参照。

させる」という魔法が用いられていることは明白である。これら2つの童話に比べると、『チビ助ムック』においては、不思議な力を持つ道具、すなわち「大きな靴」と「金貨銀貨を探し当てる杖」が扱われているのみである。その他に、人間の鼻を長くし、耳を大きくするイチジクが扱われているが、これは魔法使いが使うものではなく、不思議な力を持つ自然界の単なる産物として描写されている。しかも、上述の靴と杖を本来所持していたアハヴツィ奥さんは、わずかながら「魔女」ないし「魔法使い」の特徴をもって描写されているものの彼女は、物語の中で魔法を使っていない。ここで『コウノトリになったカリフ』、『チビの鼻助』、『チビ助ムック』というハウフの一連の童話を魔法というキーワードの下に比較分析してみると、次のような結果が得られる。

ハウフ童話3話の比較表

童話 項目	『コウノトリになったカリフ』(A)	『チビの鼻助』(B)	『チビ助ムック』(C)	備 考
1. 主人公	カリフ。	ヤーコブ。	ムック。	ヤーコブのみが固有名詞。
2. お相手 (女性)	醜いフクロウ(実は、インドの姫ルーザ)。	ミミ(魔法使いヴェッターボックの娘)。	無し。	ムックのみお相手無し。
3. 魔法使い の登場	有り。邪悪な魔法使いミツラ(魔法使いカシュヌールの息子)。	有り。魔女。魔法使いヴェッターボック。	無し。	「アハヴツィ奥さん」は、わずかながら魔女の特徴を持っている。
4. 魔法	魔法の粉を嗅ぎ、東に向かって3度おじぎをし、ムターボルと唱える。	「ヨロコンデクシャミスル草」という特別な薬草を用いる。	魔法の靴。魔法の杖。(2つともアハヴツィ奥さんの屋敷から盗み出す。)イチジク。	魔法は、何らかの道具・薬によって実現する。
5. 魔法の効果	動物に変身し、動物の言葉が分かる。	鼻の長い、醜いチビに変身させられる。	靴を履いて、片方のかかとで3回廻ると、好きな所へ行ける。／杖は、金が埋まっている所では3回、銀なら2回地面を叩く。／イチジクを食べると耳がロバの耳になる。2番目の木のイチジクを食べると、元に戻る。	イチジクの木は、森の奥に生えている。
6. 禁止事項	変身したら、笑ってはいけない。	無し。	無し。	民俗童話に近いのは(A)。
7. 処罰	魔法使いミツラを吊るし首の刑に処し、その息子をコウノトリに変える。	公爵と侯爵の間に「薬草戦争」が起こる。	ムックを信頼しなかった王の耳は、そのままにしておく。	
8. 結末	カリフと姫は結婚する。	ヤーコブとミミは、それぞれの幸せを求める。	世捨て人となって、世間を批判する。	幸福度は、(A)、(B)、(C)の順番。

この比較表に基づけば、次のような興味深い事実が判明する。

1. 主人公が「典型的な身分を表す名称」で呼ばれるという点において、また明確なハッピーエンドを持っているという点において、『コウノトリになったカリフ』が民俗童話に近い形式を持っている。〔(B)では固有名詞、(C)では渾名。〕
2. 主人公に相手もおらず、ハッピーエンドもなく、魔法使いも登場しない『チビ助ムック』が、

形式上最も現実の論理に基づく「短編小説」に近い。¹¹

3. ハウフの童話の扱う内容が夢から現実へと移行して行ったとすれば、彼の代表的な3つの童話は、『コウノトリになったカリフ』、『チビの鼻助』、『チビ助ムック』という順番で成立したと考えられる。

確かに、民俗童話から創作童話、短編小説という順で現実味の度合いが増して行くと考えれば、A, B, Cの順でこれらの童話が成立したと想定されるが、しかし、ハウフがドイツ・ロマン主義の時代に活躍したことを考慮に入れると、別の順序も想定される。つまり、ハウフはE. T. A. ホフマン(Ernst Theodor Amadeus Hoffmann, 1776-1822)から大きな影響を受けているゆえに、ちょうどホフマンがファンタジーに満ちた『カラー風の幻想作品集』(*Fantasiestücke in Callots Manier*, 1814)を書き上げた後に、その対極に立つ現実的な『悪魔の霊液』(*Die Elixiere des Teufels*, 1816)を書き上げ、その後に再びファンタジーと現実が見事に混淆した『牡猫ムルの人生観』(*Lebensansichten des Katers Mull*, 1820)と『蚤の親方』(*Meister Floh*, 1822)を書いたように、最初に民俗童話に近い『コウノトリになったカリフ』を書き、今度はその対極にある短編小説に近い『チビ助ムック』を書き上げ、最後にファンタジーと現実が混淆した『チビの鼻助』を書き上げたとも考えられる。ただし、この童話においてファンタジーと現実が「見事に」混淆しているかどうかは、残念ながら留保せざるをえない。というのも、公爵と侯爵の間にはその後「薬草戦争」(*Kräuterkrieg*, S. 170)という大戦争が起き、いくども会戦が行なわれたが、最後には和議が結ばれ、この和平は「パイ平和」(*Pasteten-Frieden*, S. 170)と呼ばれたと語られていながら、この経過がほんの数行で描かれているにすぎないからである。この意味において、結末のハッピーエンドは、不完全なものと言わざるをえないし、読者に竜頭蛇尾に終わっているという印象を与える。加えて、食べると鼻と耳が大きくなるイチジクや不思議な靴と杖は興味深い発想ではあるが、ハウフ独自の完全に斬新なアイデアとは言えない。食べると鼻と耳が長くなるという逸話は、周知のように、ギリシャ神話におけるミダース王に関する「王様の耳は、ロバの耳」という話からの連想とも考えられる。一層確実だと思われるのは、グリム童話における『レタスロバ』(KHM 122)から着想を得たという仮説である。¹² 他方、靴の方は、シャミッソーの『影を失くした男』における「7里靴」からの借用であると思われる。

このような点を考慮に入れば、『チビ助ムック』は、創作童話の中でも「民俗童話の様式をもつ童話」や「理念を含む童話」ではなく、現実世界を童話の手法で描写する「童話風物語」¹³に近いと判断される。

4. アウトサイダーとしてのムック

ドイツ・ロマン派の作家であるE. T. A. ホフマンは、その主人公が理想と現実の狭間に立ち、そ

11 拙著『童話を読み解く』同学社、1999年、23-48ページ参照。

12 参考のために、この童話の拙訳を論文末に掲げておく(Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. 3 Bde. Band 2. Stuttgart [Reclam] 1980, S. 172-179. 翻訳のページ数は、レクラム文庫のページ数による。なお、翻訳に際しては、次の翻訳を参考にさせて頂いた。『完訳 グリム童話集』[全7巻]、野村法訳、筑摩書房、2000年、第5巻、163-174ページ参照。)

13 『童話を読み解く』、前掲書、41-43ページ参照。

の軋轢に挫折し、完全に俗世間を捨て、隠者になる物語を書き上げている。アルニム (Achim von Arnim, 1781-1831) がブレントナーノ (Clemens Brentano, 1778-1842) と共に発行した「隠者新聞」(*Zeitung für Einsiedler*) も、こうした時代の潮流に乗ったものであった。ハウフも、バクダッド、アレクサンドリア、コンスタンティノーブルといった異国の地に舞台を設定した物語を数多く書き上げている。またハウフは、弱冠23歳にして、当時の人気流行作家であったH. クラウレン (Heinrich Clauren, 1771-1854) との「名義詐称、偽作、詐欺」の嫌疑で裁判に巻き込まれたゆえに、¹⁴ 当然のことながら、様々な現実世界の欲得に接し、相当厭世的な気分に見舞われたことは、想像に難くない。ホフマンの描く隠者ゼラーピオンは、ファンタジーの世界に没入し、現実の論理を完全に忘却してしまうことによって破滅する。

『隠者ゼラーピオン』(*Der Einsiedler Serapion*, 1819) の物語を語るのは、同人の一人であるチュプリアーンである。B町から2時間と離れていない所に、「ゼラーピオン司祭」¹⁵ と呼ばれる隠者が住んでいるが、彼はもともと名家の出身であり、広い教養を身に付け、ある重要な外交上の仕事に就き、そこで勤勉に働き、出世もした人間であった。しかも、「種々の知識を卓越した詩的才能と結合していたので、彼の書くものはすべて、炎と燃えるごときファンタジー、事物の奥の奥まで見抜く格別な精神に満ちあふれていた」(S. 19) と言われる。この人物が、ある日突然姿をくらまし、その後しばらくして、チロールの奥深い山岳地帯で村から村へと説教して歩く修道士として現れるのである。一旦は、その凶暴性のためにゼラーピオンは、B町の瘋癲病院へ収容されるが、病院長の治療法が効を奏し、「狂乱状態」(S. 19) から救い出されることとなる。しかし、彼が病院を脱走してB町から2時間ばかり離れた森の中に住むようになってからは、保護観察の下に森の中に住むことが容認されるのである。

ゼラーピオンは、森の中に庵をしつらえ、小さな庭を作り、そこに野菜や草花を植えて、隠者の生活を営んでいる。ところが彼は、「自分がデーキウス皇帝の圧政下にあってテーバイの荒野へと逃げ、アレクサンドリアで殉教の死を遂げた隠者ゼラーピオンであると」(S. 20) 考えているのである。チュプリアーンは、ゼラーピオンの「固定観念の原因」(S. 20) を突き止めようとする。チュプリアーンのゼラーピオンに対する熱心な説得も効を奏しない。ゼラーピオンは、確かに狂気に陥った人間なのであるが、しかし、驚いたことに彼は、別れ際に「[.....] これでいて私も、毎日色々な大変珍しい方々の訪問を受けるのです。きのうは、アリオストが私のもとにきてくれまして、その後まもなくダンテとペトラルカが続きましてね、今晚は、あの勇ましい教父エヴァーグリウスがくる予定になっています。きのうは詩の話をしましたから、きょうは教会の最近の出来事について話し合うつもりです」(S. 25-26) と言い添えるのである。続けてゼラーピオンは、彼の「より高き認識」(S. 26) について、こう述べる。

「[.....] 私たちの身の周りの空間と時間の中で起こるものを把握することができるもの、そ

14 種村季弘『偽書作家列伝』学習研究社、2001年、39-59ページ参照。

15 Hoffmann, E. T. A.: *Die Serapions-Brüder*. Darmstadt (WBG) 1978, S. 18. 以下、この作品集からの引用に関しては、この版に従い、本文引用末尾にページ数を付す。

れは精神のみなのではないでしょうか。[.....] ですから、私たちの眼前で起こる出来事を把握するのが精神のみであるとししましたら、精神がそれと承認するものが、やはり実際に起きていたということになるのです。[.....]」(S. 26)

ゼラーピオンは、このような認識に基づいて、チュプリアーンに1つの短編小説を語るが、これは彼に「炎と燃え立つファンタジーの才能を具え、才気あふれた類稀なる詩人にしかできないような構想力と実行力を持っている」(S. 26)という印象を与えるのである。ゼラーピオンの語りの切れ味の良さとものごとを良く見抜く悟性に感心しながら、チュプリアーンはゼラーピオンのもとを去るが、その後3年ばかりして再びゼラーピオンを森に訪ねると、ゼラーピオンは、すでに死んでしまっていたのであった。

これに反し、ハウフの描くムックは、決して現実世界の論理を見失ってはいない。彼は、自分の論理に合わない現実世界に身を置くことを嫌うのである。そうして彼は、現実世界の外部に立って、現実世界へ厳しい批判の目を向け、ときとしてその中へ「グロテスクなもの」を投げ込む。そうすることによってムックは、現実世界に住む俗人の認識を高めようと試みる。この意味においてムックは、俗人に嫌われて現実世界から「村八分」のように追い出された人間ではない。彼は、むしろ積極的に現実世界の外に立ち、絶えず現実世界における俗人の認識を改めようと現実世界に働きかける。C. ウィルソンの『アウトサイダー』を翻訳した福田恒存は、アウトサイダーの特質について次のように述べている。

ウィルソンの「アウトサイダー」は、その明確な否定の意識によって、強い自己肯定の積極的な意味を獲得する。かれは単に「局外者」でも「よけいもの」でもない。なるほど、かれは「外側にいるもの」には相違ないが、それは、内側にもぐりこみたいのにはじきだされたからではなく、みずからの意思で内側を拒否するからである。かれは秩序としての内側を拒否する。秩序を信じないのではない。現存の秩序を信じないのである。いいかえれば、かれのうちにある、より大きな、より強度な秩序感に照らして、現存の「インサイダー」の秩序を虚偽と見なすのである。したがって、「アウトサイダー」は、意識するとしないとにかかわらず、秩序を信じ、秩序の回復を内心めざしている。¹⁶

『チビ助ムック』における主人公ムックも、積極的なアウトサイダーとして、現実世界の外側に立ち、そのグロテスクな容貌によって現実世界の俗人たちに不気味な印象を与え、その魔法の杖と靴によって人々に驚愕の念を覚えさせることによって、俗人たちの認識を新たにさせる。それは、あたかもムックが現実世界の中へ手榴弾を投げ入れ、それによって現実世界の一部を破壊し、そこに安住する俗人に新たな現実世界の構築を迫るかのようである。ムックがそのような、一見無謀とも思われる行動を取るのには、彼の世界観の方が、現実世界の俗人たちよりは高い認識に基づいて

16 ウィルソン、コリン『アウトサイダー』福田恒存・中村保男訳、紀伊國屋書店、1983年、325ページ。

いるからである。¹⁷ この認識の止揚は、硬直化した現実の論理の破壊を意味している。現実世界も、そこに生活する人間同様、常に新陳代謝を繰り返さざるを得ない運命にある。現実世界に安住したい人間にグロテスクな容貌のムックは、不安を与えるかも知れないが、しかし、認識の止揚による絶えざる世界観構築可能性こそ、世界が健全に存続しうる大前提に他ならない。社会とて、新旧論理の新陳代謝を忘れてしまうと、瓦壊の危機に瀕するのである。

5. ムックの社会的意識

『チビ助ムック』が収録されている『隊商』は、杵物語を採った童話集である。この文学形式は、E. T. A. ホフマンの杵物語『ゼラーピオン同人集』(*Die Serapionsbrüder*, 1819-21)¹⁸ と『千一夜物語』¹⁹ から大きな影響を受けている。アラビアの広大な砂漠を護衛隊に守られた5人の商人から成る隊商が進んでいる。そこに盗賊団の一味によって捕えられたが、首尾よく逃亡してきたというセーリム・バルフと名乗る男が、商人たちに同行する許可を求め、受け入れられる。そうして5人の商人とセーリム・バルフは、旅と食事を共にするが、バグダッドの大臣の甥だと言うセーリムの提案で、退屈凌ぎとして食後順番に、なにか1つ物語を話すことを提案し、これが受け入れられる。これが、『隊商』という杵物語の持つ大杵の設定である。

『チビ助ムック』を語るのは、「若くて愉快な商人ムレイ」(S. 77) である。このムレイの故郷は「ニケア」(S. 78) であると言われる。ムレイは、チビで頭だけが大きいムックを幼い頃からかってばかりにしたのだが、そのせいで嫉の厳しい父親から罰として長いキセルで「25回たたかれる」というお仕置きを受けたことを、物語の冒頭で語る。そしてこの童話を語り終えると、若い商人ムレイは、ムックのことを今では尊敬していると、次のように告白する。

このような話を父は語ってくれました。私は、チビでも立派な人にひどいことをしてしまったことを後悔していると、父に告げました。父は、罰として決めていた回数の、残りの分だけ、また私を叩きました。私は友だちに、チビ助ムックの不思議な運命の話をしました。それどころか私たちは、ムックが生きている間じゅうムックを尊敬し、まるで判事か法律学者にするような丁寧なおじぎをムックにしたものです。(S. 98)

このことから分かるように、作者のハウフも、『チビ助ムック』の語り手である商人ムレイのように、「悪いことをした子どもには、体罰によって正しいことを叩き込むべきである」という教育方法を提案していると考えられる。²⁰ ムックの仕返しは、その婉曲的表現であると解釈される。

17 コリン・ウィルソンによると、アウトサイダーには「1. 直観, 2. 実存主義, 3. 道徳力」という3つの特性が具わっていると言われる(『続アウトサイダー』中村保男訳, 紀伊國屋書店, 1970年, 152-185ページ参照)。同時に、コリン・ウィルソンは、アウトサイダーを「自分が気に入らない人間」(同書, 6ページ)と呼んでいる。直観が働き、道徳力がある人間が「自分が気に入らない」とすれば、その人間は、必然的に仰ぎ見る絶対的な価値観を保持していると考えざるを得ない。とすれば、アウトサイダーは、精神分析学で言われる「超自我」の支配下にあると言えるであろう。それゆえに彼は、「自分が気に入らない」ばかりか、「他人も気に入らなく」なるのである。このような状況は、ムックにも当てはまる。

18 Vgl. *Wilhelm Hauff Werke*. 2 Bde. Hrsg. v. Bernhard Zeller. 2. Bd. Frankfurt am Main (Insel) 1969, S. 693f.

19 Vgl. Hauff, Wilhelm: *Sämtliche Märchen*, a. a. O., S. 432f.

20 拙論「体罰に代わる教育手段としての警策」, 鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』第65号, 2007年, [109-154ページ], 137ページ参照。

というのもムックは、その時王に実際、体罰を加えることができたのにもかかわらず、王の長い鼻は元通りに直し、その大きな耳だけを残すという寛大さを示したからである。しかしながら、ムックの現世に正義を求める心は、いささかも変わっていない。彼は、物事の正義を見抜けず、その結果正義の者を蔑ろにし、冷遇しがちな人間を軽蔑している。その証拠に、物語の末尾で次のようなムックの暮らしぶりが語られる。

そのとき以来、チビ助ムックはこの町で、たいそう裕福に、けれど独り寂しく暮らしています。というのもムックは、人間嫌いになってしまっているからです。(S. 97)

ムックの姿恰好は、一貫して変わっていない。社会の人々に嘲笑されながらもムックは、決して自分の醜い外見を変えようとはしない。逆に、社会の醜い側面を修正しようとするのである。ハウフの代表的な3つの童話、すなわち『コウノトリになったカリフ』(1826年)、『チビの鼻助』(1827年)、『チビ助ムック』(1826年)は、ロマン主義者から徐々に現実主義者へと変貌してゆくハウフ自身の内面の変化に相応していると考えられる。この内面の変化を菅野瑞治²¹は、次のように要約している。

純粋で熱烈な変革主義、理想主義から、君主・貴族・市民の三者を柱とする調和主義的国家理念へと変化し、更に人道主義的な内的変革へと「引きこもり」の構想へと変貌を遂げたわけである。²¹

ここで言及されている「純粋で熱烈な変革主義、理想主義」をハウフが目指した時期に『コウノトリになったカリフ』が書かれ、次に「君主・貴族・市民の三者を柱とする調和主義的国家理念」を目指した時期に『チビの鼻助』が書き上げられ、最後に「人道主義的な内的変革」を目指した時期に『チビ助ムック』が創り上げられたと推測される。深い現実を洞察する力を身に付け始めた作家ハウフの眼には、自分の抱く理想に反し、眼前の現実が徐々にグロテスクに映り始めたのであろう。彼の「引きこもり」は、決して自己と社会との関連を絶つことを意味してはいない。グロテスク様式に特有な緊張関係は、対極的な位置に立つものを一定の「距離」をとって併置するところに生ずる。が、一方の極に立つ不合理なものは、他方の極に立つ合理的なものの中に押し入って、その合理的なものと同等の存在権を主張するゆえに、グロテスク様式の緊張関係は、一定の時間の後に解消されるべき性質のものであると言わねばならない。物語に即して言えば、それまで合理的だと見なしてきた現実世界の秩序・論理が崩壊するとき、読者は、不合理なものを含めた上で、さらに確実な存在の基盤、すなわち現実世界の一層合理的な解釈を見出すまで模索し続ける羽目となる。これが、グロテスク様式に内在する認識の止揚という本質的機能であると考えられる。この認識の止揚は、1回限りのものではなく、最高の認識に到達するまで、弁証法的に繰り返されるものである。ホフマンが新しい認識を迫るのは、日常世界の秩序・論理に無批判に盲従している、いわゆる

21 菅野瑞治也「ヴィルヘルム・ハウフにおける夢と現実」、京都外国語大学ドイツ語科紀要「Brücke」第3号、54ページ。

「俗物」と呼ばれる人々に対してである。『チビ助ムック』においては、とりわけ外見にのみ捕われ、人間の誠実な心を見抜けない、洞察眼の欠如した俗人に批判が向けられている。

ホフマンの『黄金の壺』(*Der goldne Topf*, 1814)²²における主人公アンゼルムスの現世での恋人ヴェローニカは、「枢密顧問官アンゼルムス夫人」という虚像を求めていたのであるが、グロテスクなものの経験を通じて、今や誤った認識を止揚して、「枢密顧問官ヘルブランド夫人」という実像を獲得する。他方、現世の魅力とヴェローニカの美しさに幻惑されて両世界の間で揺れ動いていたアンゼルムスも、厳しい試練の後に「ヴェローニカとの結婚」という虚像を克服して、アトランティスにおける「ゼルペンティーナとの結婚」という実像を獲得するのである。グロテスク様式は、人間に新しい認識の獲得を迫るのであり、その様式とは、仮象の世界を破壊して、各個人の真実を獲得するものであると考えられる。

グロテスク様式のもつ対極的緊張関係は、合理的なものと不合理なもの、現実世界とポエジーの世界、市民の世界と芸術家の世界、人間と自然、精神と肉体、男と女、善と悪といった諸々の対立原理によって作り出される。²³ まさしく、ポエジーの世界を理解する者のみが、対極的なものを調和しうるのである。そして、この対極的なものとは、ここにおいて美と醜、合理的なものと不合理なもの、日常世界と非日常世界、精神と肉体、人間と自然、意識と無意識、アポロンの世界とディオニュソスの世界等々を指している。この対極的なものの総合に先立って、両世界の間で存在を賭けた戦いが展開されることとなる。この存在を賭けた戦いを芸術的に形象化しようとするところにグロテスク様式が成立するのである。

通常、弁証法的図式においては、テーゼとしての現実に対して、アンチテーゼとしての理想が対置され、そこから総合としてのジンテーゼが生み出される。しかし、ハウフ文学の場合、最初にテーゼとして民俗童話に近い『コウノトリになったカリフ』が書かれ、これに対して短編小説に近い『チビ助ムック』が書き上げられ、最後にジンテーゼとして『チビの鼻助』が創り上げられたと推定される。ホフマン文学における弁証法的創作過程にあって、最終的には『ブランビラ王女』(*Prinzessin Brambilla*, 1820) という傑作が創り上げられたのであったが、これに反してハウフ文学の場合、『チビの鼻助』は秀作と呼ばれることはあっても、傑作とは呼ばれえないであろう。というのも、この創作童話の結末が、なんといっても「竜頭蛇尾」の印象を免れにくく、従ってまた「達人」とか「巨匠」というイメージからほど遠いからである。ハウフが26歳で夭折せずに、『チビの鼻助』を、とりわけ物語の結末をさらに詳しく語り、主人公ヤーコプとミミが結婚し、公爵と侯爵の間で起こった「薬草戦争」を、2人が一緒に作り上げた絶品パイによって調停し、「パイ和平」を実現したという風に物語を展開していたならば、この童話は傑作と呼ばれうるものに仕上がっていたかも知れない。

グロテスク様式を成立させる対立項の両極として、『チビ助ムック』が設定しているのは、社会の主導者(主人、王等)に対して、他方外見は醜いが、誠意を尽くす人間である。前者は、社会の

22 E. T. A. Hoffmanns Werke in 5 Bänden. München (Winkler) 1978. 1. Bd., *Fantasie- und Nachtstücke*.

23 O. F. ボルノウは、ホフマンの『黄金の壺』が「日常性」(Alltäglichkeit)と「より深い現実」(teifere Wirklichkeit)という2つの世界の対立によって構成され、さらにそれぞれの世界が「善き原理」(das gute Prinzip)と「悪しき原理」(das böse Prinzip)との対立によって構成されるという具合に、二元性(Dualismus)によって重層的に構築されている点を指摘している(Vgl. Bollnow, Otto Friedrich: *Unruhe und Geborgenheit*. Stuttgart/Berlin/Mainz [W. Kohlhammer] 1968, S. 207- 226)。

主導者であるものの、内的な真実と虚偽を見抜く力が無い。他方、後者は、外見は醜いものの、主人に誠意を持って仕えようとする。「賢者と愚者」、「美女と野獣」といった類の二項対立の調和は、熟考するに、古今東西における解決困難な大問題であるのかも知れない。この両者が首尾よく調停される所にユートピアが生まれるのであろうが、残念ながら両者は、必ずと言ってよいほど、どこかでその歯車がかみ合わない羽目となる。果たして、人間の正しい心の在り方を見抜く社会の主導者は、智者ないし救世主と呼ばれる人々以外には存在しないのであろうか。ユートピアを実現すべく、「不平を言うムック」は、アウトサイダーとして、この社会的問題、すなわち二項対立の調和を絶えず読者に問いかけているのである。

〔参考資料；拙訳『レタスロバ』(KHM 122)〕

(S. 172) むかしむかし、あるところに若い狩人がいて、けだものを待ちぶせるために森へと出かけました。この狩人は、元気よく、陽気な心根の善い若者で、草笛を吹きながら、どんどん進んで行くと、年とった、みにくいばあさんがやってきました。ばあさんは、狩人に声をかけて、「こんにちは、狩人さん、陽気で、楽しそうでございますな。けどね、あたしゃ、お腹がへって、のどがかわいてたまらんのじゃがねえ。なんか、めぐんではくださらんかのう」と言いました。狩人は、その貧しいばあさんが、かわいそうになって、ポケットに手を入れると、できるだけのお金を手わたしました。それから、狩人が先へ行こうとすると、ばあさんは、狩人を引きとめて、こう言いました。「なあ、狩人さん、あたしの言うことを聞くんじゃよ。おまえさんは、善い心根をしているから、一つ良いものをあげよう。どんどん道を進むがよい。しばらくすると、一本の木のところに出るがな、その上には九羽の鳥がいて、一枚のマントをツメでつかんで奪いあっておるじゃろ。そしたら、鉄砲をかまえて、そのど真ん中に撃ちこむのじゃよ。鳥どもは、マントを落とし、それに、鳥どもの一羽も弾にあたって、死んで落ちてくるじゃろ。そのマントをもらえばええ。そりゃ、願かけマントでな、それを肩にはおって、どこそこへ行きたいと願をかけさえすりゃ、アツと言うまに、そこに着いておるのじゃよ。死んだ鳥からはな、心臓を取り出して、それを丸ごと飲みこむがええ。(S. 173) するとな、毎朝起きるたんびに、金貨が一枚枕の下から出てくるんじゃよ。」

狩人は、賢いばあさんにお礼を言い、心の中で「あのばあさん、おいらにすごいもんを約束してくれたけど、みんな、その通りになってくれればなあ」と考えました。ところが、百歩ほども行くと、頭の上の木の枝の間で、キーキー、ピーピーと鳴く鳥の声が聞こえてきました。狩人が上を見ると、そこにたくさん鳥がいて、くちばしと足でもって、一枚の布きれを奪いあっていました。かん高い声を立て、引っぱりあったり、つかみあったりしているかのようでした。「はてな」と、狩人は言いました。「こりゃあ、きみようだ。まちがいなく、あのばあさんが言った通りになってきたぞ。」そこで狩人は、鉄砲を肩からはずすと、ねらいをさだめて、鳥たちのど真ん中へ撃つと、羽があたりに飛び散りました。そのとたん、鳥たちは、大きな鳴き声をあげて飛びざりましたが、その中の一羽が死んで落ちてきて、それからマントも同じように舞い落ちてきました。そこで狩人は、ばあさんに言われた通りに、鳥の胴体を切り開いて、心臓をさがし、それを飲みこみ、マントを持って家へ帰りました。

あくる朝、目をさますと、狩人は、おばあさんの約束を思い出し、ほんとうにそうになっているかどうかを知りたくなりました。枕を持ち上げると、キラキラ光る金貨がありました。狩人は、次の日の朝も金貨

を一枚見つけ、そうして目をさますたびに、同じことが起こりました。狩人は、たくさん金貨を集めましたが、しまいには、「金貨をたくさん持っていたって、うちにいたんじゃ、なんの役にも立ちやしない。旅に出て、世の中を見てまわることしよう」と考えました。

そこで狩人は、両親に別れを告げると、リュックサックを背負い、鉄砲を肩にかけて、世の中に出て行きました。ある日のこと、狩人は、うっそうと繁った森を通り、その森のはずれにいくと、目の前に平原がひらけ、そこにりっぱなお城が建ってありました。お城の窓辺には、一人のばあさんと、とても美しい乙女が立っていて、下を見おろしていました。ところが、そのばあさんは魔女で、その娘に向かって「ほら、森から出てくるやつがおるわい。(S. 174) あいつは、すばらしい宝を身につけておるぞえ。なあ、娘や、あいつをだまそうちにして、あの宝を奪おうじゃないかえ。あの宝は、あいつよりもあたしらが持っている方がええ。あいつは、鳥の心臓を持っておってな、それで毎朝金貨が一枚枕の下から出てくるのじゃよ」と言いました。ばあさんは娘に、どのようにして狩人がその宝を手に入れたか、そして、それを奪い取るにはどのようにふるまうかを話して聞かせ、しまいには、娘をおどして、おこった目つきで、「あたしの言うことを聞かなきゃね、あんたひどい目にあうぞえ」と言いました。さて、狩人が近づいて行くと、娘の姿が目にとまりましたので、狩人は、「もう長いこと、あちこち歩きまわりましたから、一つここいらで休憩して、あのりっぱなお城に泊まることにしよう。お金なら、たんまりあるからな」と、一人つぶやきました。けれど、そのほんとうの理由は、狩人がその美しい娘に目をつけたからなのです。

狩人がお城の中に入ると、歓迎され、手厚くもてなされました。まもなく狩人は、魔女の娘にほれこんでしまい、もはやほかのことはなにも考えられなくなり、娘が望むことはなんでも喜んでその通りにするようになりました。すると、ばあさんが、「さてと、鳥の心臓をちょうだいしなくちゃねえ。それをなくしたって、あいつはなにも感づきやしないよ」と言いました。二人は、煎じ薬を調合し、それが煮えると、ばあさんは、それを杯に入れて、これを狩人に手わたすようにと言って、娘に与えました。娘は、「さあ、あなた、あたしの健康を祝して、乾杯してね」と言いました。そこで狩人は、杯を手に取り、その飲み物を飲みましたが、そうすると、鳥の心臓をはき出してしまいました。娘は、それをこっそり持ちさり、今度は自分が飲みこんでしまいました。それというのも、ばあさんがそれを欲しがっていたからです。そのときから、金貨は、もはや狩人の枕の下から出てこなくなり、娘の枕の下から出てきましたので、毎朝ばあさんがそれを取りにきました。ところが、狩人は、すっかり娘にほれて、イカレてしまっておりましたので、ほかのことは考えられず、娘といっしょにいることばかり願っておりました。

すると、年とった魔女が、「鳥の心臓を手に入れたからにや、願かけマントも奪わにゃならん」と言いました。娘は、「それは、残しておいてあげましようよ。(S. 175) だって、あの人は、財産をなくしてしまっただけなんですもの」と答えました。これを聞くと、ばあさんは、おこって、「あの手のマントはな、この世でめったに見つけられない、そりゃあすばらしいもんなのじゃよ。もらわずにおいてなるもんか」と言いました。ばあさんは、あれこれとくらみごとの指示を与え、言う通りにしないと、ひどい目にあわせるよ、と言いました。それで娘は、ばあさんの言いつけ通り、あるとき窓辺に立って、とても悲しそうなふりをして、遠くの方を眺めておりました。すると狩人は、「どうしてそんなに悲しそうな顔をしているの」とたずねました。「あのね、あなた」と、娘が答えました。「この向かい方にはザクロ石の山があつてね、とってもすてきな宝石がとれるのよ。あたし、それがとっても欲しくて欲しくて、その宝石のことを思うと、ひどく悲しくなるの。でも、だれも取ってこれませんものね。空を飛ぶ鳥たちしか、そこへは行けません。人間には決してむりよね。」「あなたの悲しみがそれだけのものなら」と、狩人は言いました。「あなたの悲しみをまもなく取りのぞいてあげましよう。」こう言って狩人は、娘をマントの下に入れて、ザクロ石の山へ行

きたいと願をかけました。すると、アッと言うまに、二人は、その山の上に着いておりました。いちめん宝石がキラキラ輝いていて、それを眺めていると、楽しくなりました。二人は、一番美しく、一番値打ちのあるものを拾い集めました。ところが、ばあさんは、魔法をかけて、狩人のまぶたが重くなるようにしておきました。それで狩人は、娘に「ちょっと座って、休もうよ。とても疲れて、もうこれいじょう立ってられないよ」と言いました。二人が腰をおろすと、狩人は、頭を娘のひざにのせて、眠りこんでしまいました。狩人が眠りこむと娘は、マントを肩からはずして、それを自分の肩にかけ、ザクロ石と宝石を拾い集めて、家に帰りたいと願をかけました。

狩人は、眠りに眠って、目をさましてみると、恋人が自分をだまして、荒れはてた山に置きざりにしたことに気づきました。「ああ」と、狩人は言いました。「この世の中は、なんと裏切りに満ちていることか！」狩人は、悲しみと心の痛みにおそわれて、どうしてよいものやら分かりませんでした。ところが、この山は、荒々しく、おそろしい (S. 176) 大男たちのもので、この者どもは、ここに住んで、したいほうだいの暮らしをしておりましたが、まもなくこの連中の三人が、自分の方へやってくるのが、狩人の目にとまりました。そこで狩人は、寝ころんで、ぐっすり眠りこんでいるふりをしました。さて、大男たちは、近よってくると、最初の大男が足で狩人をけると、「なんという地虫だい、ここで丸くなって眠っているのは」と言いました。二番目の大男が、「ふみ殺しな」と言いました。けれども、三番目の大男が、バカにして、「ムダなこった。まあ、生かしといてやれよ。こいつあ、いつまでもここにおれるわけでもねえし、もっと高く登りゃ、雲がつかまえて、つれてくよ」と言いました。そんな話をしながら、大男たちが通りすぎましたが、けれど、狩人は、そのことばをおぼえていて、大男たちが行ってしまうと、すぐに起きあがり、山のとっぺんに登りました。狩人がそこにしばらく座っていると、ひとかたまりの雲が流れてきて、狩人をつかまえて、運びさりました。雲は、しばらくの間空をただよっておりましたが、やがて下の方へおると、四方を壁にかこまれた大きな野菜畑の上へ舞い降りました。そこで狩人は、レタスと野菜との間の地面にやんわりと降りました。

狩人は、あたりを見まわして、「なにか食べものがありさえすりゃあな。お腹がペコペコだよ。これじゃ、先へ行くのも難儀だな。けど、ここにはリングモもナシも、果物なんてものは見あたらないぞ。いちめんレタスばっかしだな」と言いました。とうとう狩人は、「こまったときには、サラダだって食べれるさ。特別おいしいというわけじゃないけど、元気は出るだろうよ」と考えました。そこで狩人は、きれいなレタスを選んで食べました。ところが、二口三口食べるか食べないうちに、きみょうな気分になってきて、自分の体がまったく別のものになった気がしました。足が四本生え、頭がバカでかくなり、長い耳が二本ついていました。狩人は、自分がロバに変身しているのに気づいて、仰天してしまいました。それでも狩人は、あいかわらずお腹がペコペコで、ロバとなった今、みずみずしいレタスは、たいへんおいしい味がしましたので、ムシャムシャと食べつづけました。しまいに狩人は、別のレタスが生えているところに着きました。ところが、狩人がそれを食べるか食べないうちに、またしても (S. 177) 体に変身する感じがすると、もとの人間の姿に戻りました。

そこで狩人は、横になって、疲れをいやすために眠りました。あくる朝、目をさますと狩人は、悪いレタス一個と良いレタス一個をもぎ取り、「こいつを使って、おいらの宝を取り戻し、裏切り者どもをこらしめてやるぞ」と考えました。それから狩人は、二個のレタスをリュックサックにつめ、壁を乗り越えて、恋人のお城をさがしに出かけました。二、三日歩きまわると狩人は、幸運にもお城を見つけ出しました。そこで狩人は、すばやく顔を茶色にぬると、自分の母親でも見分けがつかないほどになりましたので、お城の中へ入って、一夜の宿をもとめました。「とても疲れて」と、狩人は言いました。「もう先には行けませ

ん。」魔女が、「あなたさまは、どなたかのう。どんな仕事をしているのかのう」とたずねました。狩人は、「わたくしは、王さまに使わされた者で、お天道さまの下でできた一番おいしいレタスをさがしておるのです。幸いそれを見つけましてな、ここに持っているのですが、けれど、日差しがジリジリと照りつけるものですから、いたみやすい葉がしなびそうで、このまま持ち運んで行けるかどうか分からないのです」と言いました。

ばあさんは、おいしいレタスと聞くと、食べたくなくて、「ねえ、あなた、そのすばらしいレタスを味見させてくださいな」と言いました。「よろしゅうございますとも」と、狩人は答えました。「わたしは、レタスを二個持ってきましたので、一個さしあげましょう」と言って、狩人は、リュックサックを開けて、ばあさんに悪い方のレタスをさし出しました。魔女は、あやしみもせず、新しい料理のことを考えると、たくさんのだれが出てきましたので、自分で台所に行って、準備に取りかかりました。用意ができると、魔女は、それをテーブルへ運ぶまで待ちきれずに、その場でレタスの葉を二、三枚口に入れてしまいました。魔女がそれを飲みこむか飲みこまないうちに、人間の姿をなくし、ロバとなって、中庭へかけおりて行きました。さて、女中が台所へやってくると、サラダができあがっているのが見えたので、(S. 178) テーブルへ運ぼうとしましたが、けれども、むかしからのくせで、つい味見をしたくなって、レタスの葉を二、三枚食べてしまいました。すると、たちまちふしぎな力が働いて、女中も同じようにロバになって、ばあさんのところへかけて行きましたので、サラダの入ったボールは、床へころがりました。その間、使いの者は、美しい娘のそばにいましたが、だれもサラダを持ってこないで、やはり娘もまた食べたくなくて、「サラダは、どうなっているのかしら」と言いました。それで狩人は、「レタスのききめが、もうあらわれたな」と考え、「わたしが台所へ行って、見てまいりましょう」と言いました。狩人が台所へおりてきてみると、ロバが二頭中庭を走りまわっているのが見えましたが、けれど、レタスとは言えば、床にころがっておりまして。「これでよし。あの二人は、それそうおうの罰を受けたな」と、狩人は言って、残りの葉を拾って、それをボールに入れ、娘のところへ持って行きました。「わたしが自分で、おいしいレタスを持ってまいりました」と、狩人は言いました。「もうこれいじょう待たなくてもよいようにです。」そこで娘は、それを食べましたが、たちまちほかの二人と同じように、人間の姿をなくし、ロバとなって、中庭へかけて行きました。

狩人は、顔を洗って、ロバに変身した女たちにも見分けがつくようにして、中庭へおりて行き、「これからおまえたちに、裏切りの報いを受けさせてやる」と言いました。狩人は、ロバを三頭とも一本のロープにつなぐと、追い立てて、粉ひき場までつれて行きました。狩人が窓をたたくと、粉屋が顔を出して、なんのご用ですか、とたずねました。「たちの悪い家畜を三匹飼っているんだがねえ」と、狩人は答えました。「もうこれいじょう飼っておきたくないんだよ。おまえさんが、こいつらを引き受け、餌をやり寝床をやって、おいらの言う通りに飼ってくれたら、おまえさんが欲しいだけのお金を払うんだがね。」「ようがすとも。それで、どう飼えばよろしいんで」と、粉屋は言いました。そこで狩人は、年をとったロバは（これが魔女でしたが）、毎日三度なぐって、一回食事をやってくれ、これより若いロバは（これが女中でしたが）、毎日一度なぐって、三回食事をやってくれ、そして一番若いロバは（これが娘でしたが）、(S. 179) なぐらずに、毎日三回食事をやってくれ、と言いました。というのも、狩人も、やはり、娘をなぐらせる気にはなれなかったからです。このあとで狩人は、お城に戻りましたが、必要なものは、なんでもお城の中に見つかりました。

二、三日すると、粉屋がやってきて、お伝えしなければなりません、日に三度なぐられて、一回しか食事をもらわなかったロバは、死んじゃいました、と言いました。「ほかの二頭は」と、狩人はつづけて言い

ました。「なるほど、死んじゃおらねえし、餌も日に三回もらっておりやす。だども、ひどく元気がなくなっちゃったんで、あまり長くもたんでしょうな。」これを聞くと、狩人は、かわいそうになり、怒りをしずめて、粉屋に向かって、その二頭をつれてきてくれ、と言いました。二頭が戻ってくると、狩人は、良いレタスを食べさせましたので、二頭は、ふたたび人間の姿に戻りました。すると、美しい娘は、狩人の前にひざまづいて、「ほんとうに、あなた、ごめんなさい。あたしは、あなたにひどいことをしてしまいました。母が、むりやり、あたしにそうさせたのです。あたしは、そうするつもりなどなかったのです。なぜって、あたしは、あなたを心から愛しているのですから。あなたの願かけマントは、衣裳だなにかかっています。鳥の心臓は、煎じ薬を飲んで、はき出すつもりです」と言いました。すると、狩人は、気が変わって、「それは、そのままにしておきなさい。どうせ、同じことだよ。だってね、わたしは、おまえを正式な妻に迎えるつもりなんだから」と言いました。こうして、結婚式があげられて、二人は、死ぬまで、いっしょに楽しく暮らしました。